

仲間たちの労働 表現活動を仕事に

聖カタリナ大学 山本 万喜雄



「プロフィール」
やまもと まきお

1946年愛媛県に生まれる。健康教育学専攻。都立高校（定時制）教諭を経て、1974年より2012年まで愛媛大学教育学部に勤務。この間4年にわたって教育学部附属養護学校校長を併任。地域に根ざした健康教育、子育て支援活動に関わっている。主な著書として『えひめの教育 未来へのかけ橋』（青磁社）『共育はよろこび』（創風社出版）『いま この一冊』（愛媛民報社）『マッキーの子育て讃歌』（草土文化）などがある。現在、愛媛大学名誉教授、聖カタリナ大学特任教授。

あこがれの先生

民間教育研究運動の中で学んで四五年。私の心の中には、何人ものあこがれの先生がいます。江口季好詩集『チューリップのうた』（百合出版刊）に出合った日のことは忘れられません。

子どもの詩をこよなく愛し、児童詩教育に情熱をそそいできた江口季好先生。子どもを守る会だよりによれば、先生は二〇一四年六月四日に胃ガンで亡くなられたといひます。八八歳でした。

あこがれの先生を偲んで、先の詩集から一つの詩を刻んでおきたい。

わたしの学力 江口季好

「ちやにあひました。おちました。」

わたしは一読して、

「五時のチャイムがなったのに外で遊んでいました。お母さんにおこられました。」

と理解しなければならなかった。

をかけて。けずりぶしが、なめくじみたいになうごいた。だんご虫みたいになうごいた。」

と読まねばならなかった。

源氏物語より、外国語よりもはるかに難解な文を読みとる力、これが、わたしが習得すべき教育学と国語学の学力であった。

（江口季好・詩集『チューリップのうた』）

私にとって教育学と教師力が試されたのは、四年間にわたる障害児教育の現場での体験でした。

生徒の現場実習に寄り添って

附属養護学校（現特別支援学校）における高等部の現場実習。それは障害を抱えて生きる生徒たちの就労支援にとって不可欠の体験です。

ところで働くということには、はた（周り）の人を楽にするよろこびがあります。人はあてにされ、その期待に応えることで認められます。このことが、生きがい・働きがいにつながっているのです。「ちがいをもち味に、持ち味に一番を」と

「23とそいました。あばやでそれいくとそいました。」
これは、
「二年生の子は三年生の子とあそびました。ぼくはアンパイヤーになって、ストライクと言ってあそびました。」
と読まねばならなかった。
「きのおとさんちどらっこみばななかわいれました。とんぼれす。」
これは、
「きのお父さんに千鳥町のおもちや屋さんで、ごみトラックを買ってもらいました。うちに帰って、バナナを食べて、皮を入れて走らせました。ごみトラックは、タヤけ小やけの赤とんぼのオルゴールをならして走りました。」
と読まねばならなかった。

「なめくじ

だんごむし」

これは、

「あさ、ほうれん草にけずりぶしをかけて、しょうゆ

いえば、現場実習のフィールドで見つきたいのちの輝きを紹介しましょう。

学校ではとつてもゆつたりとした動作で実習を心配した一人の生徒。彼女は高齢者施設で食事介助の仕事を担当しました。そのおばあちゃんの食事がとてもゆつくりだったので、実習生のゆつたりテンポが高く評価されました。適材適所の役割分担に感謝したものでした。

また別の施設では、A君が計器の解体作業に熱中していました。私はうれしくなつてそのことを母親に伝えたところ、彼女はさりげなく、「Aは壊すことが好きだから」と答えたのです。A君は組み立て作業は苦手でも、解体作業は得意なのか。A君の特性「こだわり」を生かした人事配置に妙に納得したものでした。

このように私たちは、自閉症スペクトラムの障害特性を重視しつつも、生活の中でその特性は変動すること、また様々な機能の関連の上で成り立っていること等を学んできました。しかし、卒業生たちを送る場面で私の隣りにいた母親の一人が、「出来れば落第したい」とつぶやいたその言

葉に、あらためて重い障害児にとって生活・労働の受け皿が地域に乏しいことを認識させられた次第です。

もちろんこの愛媛にも、「なかま共同作業所」のように、「働くことは権利」「労働は青年期の中心的な活動」ということを学んだ当事者たちは、きょうされんに加盟し、様々な活動を展開しています。しかし、その道は困難なことが多いようです。

障害の重いことを理由に、卒業後の行き場をどう保障するか。最近、そんな悩みに一条の光が射しこんできました。埼玉県にある社会福祉法人みぬま福祉会が三〇年を記念して本を出版したので、それが『みぬまのちから ねがいと困難を宝に』（全障研出版部刊）と云う新刊です。

表現活動を仕事に

ここでみぬま福祉会の理念を紹介しましょう。

①埼玉南各地にどんな障害をもっている、希望すればいつでも入れる社会福祉施設づくりを総

合的に推進します。

②障害の種類や程度、発達段階が充分考慮され、一人一人にあった生活、労働、教育、医療が受けられ、ともに生きる「仲間」として、その自主性が尊重され、人権が最大限守られることをめざしてとりくみます。

③地域とともに、よりよい社会づくりをめざし、地域の人々と助け合いながら、ともに生きることをめざします。

この「理念」を具体化し、具体化した実践から新たに見えてきたことは何でしょうか。ここでは共同研究者である白石恵理子さんのコメントを参照しながら、「労働」に焦点をしぼってその内容を伝えます。

「みぬま」の考える労働の定義は、「社会とつながる」「お金を稼ぐ」「仲間の発達につながる」を表現活動を通して考えるというものです。職員たちは親のねがいを受けとめながら、一人ひとりにあった労働のあり方を模索してきました。

ウエス作業や缶プレスの作業のなかで、「三つ

の見通し」の重要性を実践的につかんでいきました。この「三つの見通し」とは、①量の見通し、②役割の見通し、③質の見通しです。職員のつくった見通しでも、仲間自身の見通しにつくりかえていかなければなりません。

こうした「三つの見通し」に基づく試行錯誤から、重い障害をもつ仲間たちも労働に参加できるめどがたつてきたそうです。とはいっても、仕事はできるけれども、生き生きしない、満足度や達成感が感じられないのはなぜか。職員集団はそんな疑問にぶつかっていきながら、表現活動を仕事にするという新たな展開をつかみとっていくのです。

まさに共育はアート。仕事に仲間を合わせるのではなく、仲間に合わせて仕事を見つけようというチャレンジは注目に値します。「みぬま」の大事件ポイントは、ヒューマニズムと科学と、良い意味での「ルーズさ」とか。いつの日か、東浦和駅に近い「工房集」を訪ねて、仲間たちの作品を観てみたい、そんな期待する心がわき起こってきた一冊でした。